潮風

平成9年1月20日発行(年2回刊)
〈教育後援会だより〉
しおかぜ
発行／明海大学浦安キャンパス教育後援会
〒279　千葉県浦安市明海8
電話 047-355-5112　FAX 047-355-5117

MEIKAI UNIVERSITY

新春座談会

21世紀への展望
一丸となって魅力ある大学創りを

18歳人口の減少に伴い、日本の大学は大きく変わろうとしている。「選ぶ側」から「選ばれる側」に立場が逆転し、学生が大学に求めるものも変化しつつある。どの大学も生き残りをかけて必死の努力をしているところ。もちろん、明海大学も例外ではない。その一環として、教授らを中心とする「魅力ある大学創り委員会」が発足。学内を活性化し、有意義なキャンパスライフを実現するため、あらゆる角度から討議を重ねている。21世紀へ向けて、本学がさらに魅力ある大学へとステップアップするには、何が大切なのか、先生側は「魅力ある大学創り委員会」委員長の成瀬隆教授と小泉允圀不動産学部長、学生側から「明海大学学友会」の五十嵐豪会長（不動産学部4年）、青島隆典副会長（経済学部4年）、教育後援会の丹下剛会長で活発に話し合っていただいた。

大学が本気になって生き残りを考える時代

丹下：「魅力ある大学創り委員会（以下・委員会と略す）」を簡単にご紹介いただけますか。

成瀬：この「委員会」は学長の諮問機関として設置されました。本学をどのような形で魅力あるものにしていくかということで、短期的な問題と長期的な問題とに分けて討議しています。

短期的な問題としては、語学教育と情報教育の充実、在学生に留学の機会を設けるためにいわゆる姉妹校提携の問題。そして、就職と4つの課題があります。

これらを2年間で検討し、1年目の今年は中間報告として短期的な4つの問題をまず解決し、その後の1年で中長期的な問題を考える予定です。

小泉：「委員会」がつくられた理由には、大学の進学志願者が毎年減っていることが、まずあります。就職も求人が減っています。もちろん、明海大学だけの問題ではありませんが。それから、いい先生が簡単に流出されてしまうなど、大学が生き残っていくために本気になって考えなければいけない問題が山積みという危機感があるからです。大学の活性化について、若い人たちを含めて議論できる場をということでスタートしました。

中期的な問題として、受験生が「行ってみたい」と思う魅力ある学部・学科づくりがあります。もう一つは、学生たちがキャンパスライフをエンジョイできるような空間、あるいは仕組みをつくらなくてはならない。併せて、それをやっていくために、今の事務組織でいいのか本格的な見直しも必要。

2年がかりで目標を作って、一歩一歩、前進していくことが必要です。学生も教職員も、「いずれこうなるんだ」「こういう方向に動き出したな」ということが実感できれば、みんながそれぞれの立場でがんばっていけるはず。その方向付けを「委員会」でやっていこうということですね。

丹下　剛教育後援会会長

キャンパスライフの充実がキーワードに

丹下：私も教育後援会に4年間、後半の2年間は会長を務めさせていただいていますが、委員会ができたということは大きな変化だと思いますね。では、キャンパスライフを充実させるために、具体的な案を出していただけますか。

五十嵐：学友会に対する関心が低いということもあるのですが、学友会の一般学生に対するケアがまだまだ不十分なんだと思います。

成瀬　隆教務部長
「魅力ある大学創り委員会」委員長

丹下：今年度、教育後援会ではアメリカで海外研修を実施しました。視察した6つの大学には、それぞれりっぱな学生会館があり、学生たちが大いにエンジョイしていました。明海大学にはまだそういう施設はない。キャンパスライフの充実を学生会館に結びつけるのは、決して短絡的とも思いませんが、五十嵐君はどう思いますか。

五十嵐：学生会館についてはクラブハウスの問題もあって、2、3年前から学校側に要望として出していました。その要望の一部が新クラブハウスの建設につながったと思いますが、現状はプレハブなんですね。きちんとしたものを造っていただくよう、要望していきたいと考えています。

青島：学生会館や図書館などがこれから造られるのだと思いますが、学生が使う施設ですから、建設の時にはぜひ、学生の意見を取り入れていただきたいと思っています。学生と大学側の話し合いの場を早くつくって欲しいですね。

丹下：交換留学制度が具体化しているようですが…

小泉：大学説明会に行くと、必ず質問されるのが留学制度です。特に女子学生は関心があるようです。

なるべく早く実現しないといけません。年末には実現の予定です。早ければ来年度から英米語学科、日本語学科の学生が1年間、留学できるでしょう。

小泉允圀不動産学部長

五十嵐　豪学友会会長

青島隆典学友会副会長

「大学をよくしたい」共通の目標に向かって行動を

丹下：自分の子どもが卒業しても、「明海大学はいい大学」と言えるようになってもらいたいというのが親の希望です。それはキャンパスライフの充実ということになるでしょうか。就職の問題、カリキュラムの充実、大学院をつくることもそうでしょうし、先生方が力を発揮できる環境づくりも必要。それらを絶対に早くやってもらいたいと思うんです。お金がかかることでもありますから、教育後援会がサポートしてもいいと思う。この気持ちに大学のトップも応えて欲しいですね。

青島：大学の魅力は、簡単に言ってしまえば、おもしろい先生がいて、楽しめる場があるということでしょうか。この大学に行けばこれが習えて、こういう力になると、将来自分の武器となることが明確に見えている大学が、魅力あるんじゃないかと思います。

小泉：私は本学に来て4年目ですが、今、私学が持っている難しさというのを痛切に感じています。21世紀に向けて、明海大学でいちばん大事なことは何かというと、それぞれの立場から自由に意見を表明でき、議論ができる空気だと思うんですね。学生も、教員も、職員も、それから理事者も、良い大学にしたいというのは共通の目標なのですから。

もちろん、学生会館を造ることも大事です。大学をよくするために積極的に発言し、行動していこうと、全関係者が意識を改革することが根本になくてはいけないと思っています。

丹下：今日はどうもありがとうございました。

（1996年11月14日　不動産学部長室）
構成・明光企画

明海大学に前進あれ

教育後援会の皆さまに年頭のご挨拶を申し上げます。会長として2年目の新年を迎え役員任期も残り僅かとなりましたので、ここで4年間を締めくくり一言述べさせていただきます。

まず、親として何よりも子どもが4年間の学生生活を終えて学士の称号を得ることを心待ちにしており、その機会を与えてくださった明海大学に対して心より御礼を申し上げます。

さて、明海大学への親の期待は今や極まり、4年間で明海大学はどう変わったのかと勝手な問い掛けをしていろいろ考えてみましたが、結論は4年間で前進した面と後退した面が錯綜して映り、外から見ただけではどうもはっきりしません。大学の改革を提言し、絶えざる内部努力がなされている話は学長から拝聴していますが、はっきりした成果は数年先かもしれません。また、宇田川前学部長・鈴木学部長・小泉学部長はじめ多くの先生方・事務の方とのお話では、学内の一つの制度改革を遂げるにも大変な作業を要するとのこと。日ごろから経営のトップを交えた根気のいる検討をくりかえして、意識（学内の空気）を変えていくのが大切だという意見に共感を覚えた次第です。

教育後援会はこのような大学の厳しい状況を念頭にアメリカの大学視察旅行を実施したのでありますが、その成果を踏まえて、21世紀に向けた提言を行い、明海大学の絶えざる前進を支えたいと思います。

1997年 会長　丹下 剛

海外研修レポート

―美しいキャンパスと施設の充実に感動―

10月26日
～
11月３日

海外研修、アメリカの大学を訪ねて

明海大学浦安キャンパスは開校９年目をむかえているものの歴史的にまだ浅く、学内の施設もまだ十分とは言えない状況にある。建学の精神である「国際社会で活躍し得る有為な人材の育成」のためには、まだまだ、施設の充実、教育レベルの向上を図られねばならない。教育後援会としては、学生会館などの設備充実に向けて、広い視野から今後のビジョンを築くために、海外研修を企画実施したところである。海外研修は10月26日から11月３日の期間、丹下会長以下父母８名によりアメリカの東部を中心に大学を６校訪問し、施設の見学、さらに、大学関係者と意見交換をも実施した。日程的には厳しいものがあって、各大学の施設の見学、意見交換も十分に図れなかったところもあるが、初めての経験としては満足のいくものであったと思っている。この研修の成果は、今後の大学の施設の充実に大いに役立つものと確信している。また、今回の海外研修に際しては、ニュージャージーUMD（医科歯科大学）のDr大野博士、バルチモアジョンスホプキンス大学のシャークス教授、アトランタエモリー大学のアンサリー教授に多大なご尽力とご協力を頂き、誠に感謝に堪えなく、この紙面を借りて改めて感謝の意を表したい。

ジョンスホプキンス大学　大野博士（右２番目）
シャークス教授（中央）と海外研修参加者

1．寄宿舎

アメリカの大学は入学すると大抵の場合、２年生までは寄宿舎での生活を強制的に余儀なくされる。

寄宿舎の各室は２名以上の相部屋であり、面積も日本流に表現すれば２人部屋で８畳程度である。一般的なアメリカの住宅水準からするとかなり狭小過密な状況にあり、凡そ快適な生活を送れる仕組みにはなっていないが、それには訳があり、寄宿舎の生活が大学教育の一部として重要視されているからである。

狭い部屋に異質な人間が共同して暮らすことにより、コミュニティの一員としての社会性を養うとともに、大学に対する一体感を培うなど、勉学のみでなく人間性の修養も視野に入れて教育を行っている。

これは日本において、戦後の昭和22年に当時の占領軍であったアメリカの指導により行われた教育改革において、廃止になった旧制高等学校の教育とある部分類似しており、まことに皮肉なことである。

今後、明海大学で学生寮の建設を検討する場合、どの様な教育的な見地に学生寮を位置づけるのかが、極めて大切なことと思える。

2．学部と大学院

今回訪問した大学にはそれぞれ大学院が設置されていたが、その規模を聞いて驚いた。大学院の学生数が学部の学生数と同数の大学や、学部学生数の５割程度の大学があり、日本の状況とは大きく異なることである。

データを調べてみると、１９９０年の統計であるが、アメリカの学部生の数は約１１８６万人、大学院生の数は１５７万人であり、大学院生の比率は13％程である。それに対して日本の１９９３年の学部生の数は約１６６万人、大学院生の数は12万人であり７・２％程である。比率同士を比較するとアメリカは日本の１・８倍であり納得できる。

3．少人数教育

授業中の教室や校舎を見て、クラスルームは大きくなく、一教室は15人程度の様子である。

無論、大きな教室も無いのではなく、２００人収容の教室もあると説明を受けたが、これは低学年用のもので基本は少人数規模用のものである。授業の進め方が討論形式が主体であるということが関係していると思われるが、その方法は教育の語源であるeduce（能力を引き出す）をそのまま実践して学生の能力ＵＰを図っていること。

産業では、大量生産の先進国のアメリカにおいて、大学生を大量生産していないことが、日米の教育の在り方の差異を如実に物語っている気がした。

4．図書館

どの大学も当然のことながら図書館を併設しており、大学の規模に応じて数10万冊を越える図書館などそれぞれであるが、その開架時間は興味深いものであった。

例えば、ペンシルバニア大学の場合は月曜日から木曜日の間は、午前8時～Midnight、金曜日～土曜日は午前8時から午後10時、日曜日は午前10時からMidnightという具合である。

学生の利用があるからこのような長時間の開架を行うのだろうが、利用する学生の勉強振りに凄いものを感じる。

5．海外からの留学

どの大学も世界各国からの留学生を受け入れている。訪問をした大学では、日本からの学部留学生は２０名前後で、大学院ではその数を上まわり、１００名を越える大学もあった。

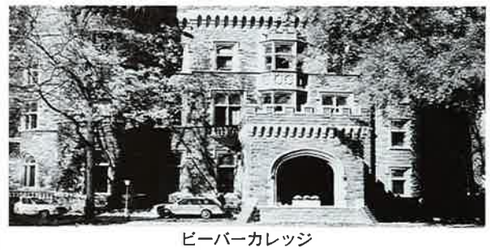
留学生の場合、英語の授業についていける語学力が問題になるが、その水準はＴＯＥＦＬで５５０点位が目処のようである。日本人学生の場合、ＴＯＥＦＬで５５０点を満たしていても、文法で点数を稼ぐケースがあり、実際の聴く、話す力が不足気味との指摘もあった。

この場合大学に併設されている語学スクールにおいて一定期間勉強をするそうで、大学の授業料の他に語学スクールの授業料も必要となる。

日本人の留学生に欠けているところは、自ら発表したり、主張したりする能力が他国の留学生と比べて足らない部分だとの説明があった。

日本人特有のシャイな一面が留学してもなかなか抜けきらないようである。

ビーバーカレッジ



ビーバーカレッジ

6．大学と寄付

キャンパスの中を歩くと様々な建物があるが、その一つ一つに人の名前が付けられている。説明では建物を寄付してくれた人の名前だそうである。

大学により多少の差はあるが、施設の建設、大学の運営面において、かなりの部分が卒業生や企業の寄付によって賄われている様子である。

例えばエモリー大学では、１９７９年にコカコーラ社から１００億円の寄付がなされ現在のキャンパスがほぼ完成し、今でも寄付は続けられているとのこと。また、州立大学においては年間予算１０００億円の大学運営費の１／３は寄付により賄われているとのことである。

日本の状況と単純に比較できないが、豊かさの規模の相違と税制面の制度の違いが背景にあるのかもしれない。

7．学費等

学費は大学により異なるが、ラトガー州立大学においてはニュージャージー州在住者で４０００ドル／年、他州在住者で８０００ドル／年、私立のビーバー大学では１５０００ドル／年、同じく私立大学のペンシルバニア大学では２００００ドル／年である。

この他に生活費として寮費などが６０００～７０００ドル／年が必要である。

8．パソコンの利用

アメリカの学生生活にとってパソコンの利用は欠かせないもののようである。

教授から学生に向けての課題の指示、学生から教授に対する課題の報告などはＥメールが積極的に活用されている様子である。

学生はそれぞれＥメールのＩＤを持っており、寄宿舎と大学のコンピューターセンターとはハードケーブルで接続されている。

そのためパソコンはコンピュータールームに多いところでは１００台単位で設置されており、学生会館の中にも設置されている大学もあった。また、勉学以外に家族との連絡に使用できる大学もあった。

明海大学においても教授と学生の絆を強めるためには、無論、フェイスツーフェイスの対面した関係が一番ではあるが、パソコンによる個別な関係の強化も、これからの大学教育における大きな鍵になるような気がする。

9．キャンパス

アメリカは広大な国土を持った国である。今回訪問した大学のいくつかは広大なキャンパスをもっていた。

ラトガー州立大学においては３つのキャンパスから構成されており、その面積の合計は東京都文京区の全面積に匹敵するという。

キャンパスには無料の循環バスが50台程走っており、２つのキャンパスにまたがって授業を受けようとすると、その移動に１時間以上費やしてしまうこともあるようである。

また、エモリー大学のキャンパスでは10～12台のバスのほか、10台の４両編成の電気自動車が走っていた。

キャンパスが広大なせいか建物と建物の間隔も広く、建物の色彩はカラーコーディネートされており、緑も多くその間をリスが遊んでいる風景が印象的であった。

10．学生会館

学生会館の内容はカフェテリア、パーティールーム、ラウンジ、ショッピングなどであるが、中にはゲームコーナーがあるものもあった。パーティールームは２００人収容の規模であり、その回りが観客席の様な構造になっているものもあった。

他に小規模は10～20人収容の会議室のような部屋が複数設置されていた。

大学によっては経営学の実践の場として、売店、食堂の経営は学生が行っているケースもあるそうで、ホテルまで経営しているケースもあるとのこと。

理論の勉強と併せて実務に役立つ勉強も行うところは、明海大学も多いに参考としたいところである。

（３ページにつづく）

ラトガー大学　学生会館内食堂

米国東海岸の大学見て歩る記

川口　一郎

まず初めに、今回の大学研修旅行の大部分をアテンドしてくれたニュージャージーUMDの大野先生とバルチモアジョンスホプキンス大のシャークス先生、アトランタエモリー大のアンサリー先生に感謝したい。大野先生には走行距離500マイル以上のマイクロバスの運転と通訳及び諸々の手続きをお願いし大野先生なしでは研修旅行は成り立たなかった。また、明海大学の諸先生からも色々と応援いただき感謝したい。

訪問大学について

10月28日ラトガー大、29日ビーバーカレッジ、ペンシルバニア大、30日ジョンスホプキンス大、11月1日エモリー大の順で訪問したが、何処の大学でも常時大学紹介をしている様子で、私達の他にも親子づれの訪問も目立った。訪問した大学では、男女学生が校内案内のアルバイトをしており、エモリー大のシャハック君の様に我々の顔を見ながら後歩きで案内をし、実に慣れている様子だった。

11．入学試験

アメリカの大学にアメリカの高校生が入学する場合は入学試験はない。

大学にはAdmission Office があり（Admission はAdmit＝入学を許可するの名詞）の事務局が入学者の決定をする。

その方法はSAT（Scholastic Aptitude Test の略）を高校生の時に受けその中で一番成績の良かった点数を申告する。SATは高校時代に4回程度受けられ、適性試験の様なもので比較的簡単な内容な試験とのこと。さらに課外活動の記録（クラブ活動、スポーツ、地域でのボランティア）と高校の先生の推薦状が必要でこれらはSATの成績と同じくらい重要である。

さらに、大学によってはEssayの課題（進学理由、将来の希望、最近の活動など）を課すところもある。

大学はこれらの内容を総合的に判断して前述のAdmission Office が入学者を決定するシステムである。さらに、ほとんどの大学で身体障害者を一定の割合（多くは15％）で入学させるという規則があるようである。

私たちが見学している間にも大学のAdmission Office には、1～2年後に入学を希望する高校生や付添いの親が見学に来ており、国は違えども子供の将来を心配する親心は何処も同じなようである。

エモリー大学 宿舎内

何処にもあるジンクス

ジョンスホプキンス大の図書館の入口の廊下のエンブレム（写真参照）は立派な物だが一度でも誤って踏むと入学も卒業も出来ないと言われている。また、ラトガー大では大きな池があり、この池を囲って恋を語らうと二人は結ばれるとのほほえましいジンクス等、日本にもあちらこちらにありそうな話である。

Eメールについて

学生一人一人にパソコンを持つ事を勧めている大学も多く、課題がディスクで出されるとか、Eメールで大学と個人が結ばれているようだ。エモリー大では学友会館の中に使用料なしで家族との連絡にEメールが利用されていた。

最後に

今回の研修で一番強く感じたのは、どの大学も海外として、学生が社員となって実際の会社経営を勉強している大学もあるとの事で、日本ではまず考えられない例であるが、卒業したらすぐ学校での勉強が役立つであろうし、将来日本の大学で考えても良い制度ではないだろうか。

「エンブレム」

想像以上の広さ

秋晴れの空の下、私たちを乗せたマイクロバスは快調に走る。ハイウェーの両側50ヤードは緩衝緑地帯で、その樹々は見事に赤や黄色に紅葉して美しい。

誰でも知っているアメリカ国土の広さについては、大学の広さにも当てはまり、ラトガー大の様に浦安市全体にいくつかのカレッジが点在している感じで交通手段として車はもちろん、約50台の無料大型バスが循環しており、2つ以上のカレッジに学ぶ時には時として移動時間を1時間以上みないといけないこともあるとかで、逆に狭い日本の大学が利点にさえ見えてくる。エモリー大ではバスの他、四輌連結の電気自動車が走っていた。

ラトガー大ブッシュキャンパスのカフェテリアでは天井を大断面集成材の「はり」を通し、木目を生かした落ち着いた雰囲気づくりが上手であった。

エモリー大の様にコカコーラから多額の寄付を受けているせいか、数棟の立派な建物を持っている。寄付についてはラトガー大を始め、予算の1／3程度を寄付でまかなっている大学が多い様だ。そのおかげかどうかペンシルバニア大やジョンスホプキンス大の様に建物の全体の調和をレンガの色、高さ等で統一している見事な例もある。どの大学にも学友会館、寮がほぼ完備されており、明海大学にとっても将来是非欲しい設備の一つである。1・2年生は必ず入寮しなければいけない大学もあるし、大学のチャペルで結婚して夫婦で寮に入っている者もおり、男子寮、女子寮の区別なくシャワールームが男女共同であったりする。エモリー大では学友会館を新築した際には古い建物を壊さずに、中に取り込む形で新旧上手に調和させていた。また、この大学の総合体育館は地下1階、地上2階、間口100m位、奥行300m位の大規模な建物で目を見張った。

ビーバーカレッジ

交換留学生について

訪問した大学の中で、ビーバーカレッジが一番熱心に私達メンバーを学長以下多数の先生が出迎えてくれ、ランチをはさんで長時間ミーティングが出来た。学生数約2700人と規模の点では明海大に似ている事もあり、一対一の交換留学生を強く希望しており、ALAと言う語学学校では歌手の郷ひろみが8ヶ月学んだという。

学生が会社を経営する

ホテルや食品会社を教授が先頭に立ちカリキュラムビーバーカレッジでは、キャンパスの中心にお城がありシンボルとしてまた、大学の事務局として使用しており外来の客からは目につくし解りやすく印象的であった。

ビーバーカレッジのように一年生は必ず1週間程度夏休み等を利用し、個人150ドル大学500ドル程度の負担でイギリスへ行かせ、他国の言葉はもちろん、文化、宗教等の吸収に力を入れている。世界で何か事が起きればその国の言葉、文化等を勉強した者がすぐ当事国で活躍出来るためにである。そのためには外国での体験豊富な先生を出来るだけ多く明海大にお迎えし、良い先生が集まれば良い学生が多く生まれるものと確信している。大野先生の話では、アメリカの大学教授は寄付集めに走らなければならない場合も多いとかで、実際の授業に大学院生等の弟子が当っている事も多いようだ。この点日本の大学生は恵まれていると信ずる。

（教育後援会　副会長）

海外研修日程

10月26日（土）	成田	発	17:25
	ポートランド	着	10:20
	ポートランド	発	13:05
	ニューヨーク	着	20:58
10月27日（日）	ニューヨーク	発	15:30
	ニュージャージー	着	19:00
10月28日（月）	9:00		
	ラトガー大学およびUMD訪問		
	ニュージャージー	発	14:00
	フィラデルフィア	着	16:00
10月29日（火）	9:00　ビーバーカレッジ訪問		
	13:45　ペンシルバニア私立大学訪問		
	フィラデルフィア	発	16:00
	ボルチモア	着	18:00
10月30日（水）	10:00　ジョンスホプキンス大学訪問		
	12:00　ジョンスホプキンス大学附属病院訪問		
	ボルチモア	発	14:00
	ワシントンDC	着	16:00
10月31日（木）	ワシントンDC	発	16:05
	アトランタ	着	17:55
11月1日（金）	9:00　エモリー大学訪問		
11月2日（土）	アトランタ	発	9:30
	ポートランド	着	11:35
11月3日（日）	ポートランド	発	13:20
	成田	着	16:55

ビーバーカレッジ・中央の建物は寄宿舎

VOICE　4年間をふりかえって

江本綾子さん
外国語学部4年
ナイキジャパン

大学生活の私の生きがいはテニスでした。高校時代でもうテニスは完全燃焼と思っていたのですが、学内にあるきれいなテニスコートを見たとたん、「もう1度テニスを」という思いが募り入部しました。当初、テニス部には女子部がなくて0からのスタート。主将として、また選手として苦難の多い道でしたが、めでたく女子テニス部を設立、練習に励みました。

その経験から得たものを生かしたいという思いで私が選んだのが「ナイキジャパン」という会社で、そんな私を選んでくれたのが「ナイキジャパン」でした。もっともっとはばたいていきたいと思っています。

覃健文(サムキムマン)さん
経済学部4年・マレーシア
㈱シャープ

「光陰矢の如し」、日本に来て丸4年経ちました。明海大学は「国際社会に開かれた大学」で、誰も君は外国人だ」という考えを持っていないようです。同級生はみんないい友だちです。

就職ゼミナールや大学パソコン室のインターネットサービスを通じて、国内外の就職情報を手に入れ、就職活動しました。おかげさまで入社希望6社のうち、5社から内定をいただきました。来年4月から大手電機メーカーのマレーシア支社「アジア部」の資材調達を担当する予定です。

将来、自分の家に日本の友だちを招待したいと思っています。マレーシアへ来たらぜひ声をかけてください。お待ちしています。

鹿沼寿行さん
経済学部4年
㈱ツクダ

大学での4年間は、学生から社会人へのターニングポイントだったと思います。企業の方は、大学生活で何に打ち込み、何を学んできたかを重要視しています。つまり、現在まで積み重ねてきた、トータルの私自身を見ています。私は大学生活において、胸を張って言えるものはありませんが、「秘書検定2級」「販売士3級」「危険物取扱乙4類」などの資格取得を心掛けました。おかげで、春から社会人になることができます。

今まで得てきた物を生かし、さらに様々なものを吸収して、社会人として飛躍していきたいと思います。